

春日井・ホテルの名所「大谷川源流」



わが街ぶらり探訪

春日井市東部の築水池(廻間町)のすぐ西側を源流とする大谷川は、毎年六月になるとホテルが飛び交い、幻想的な雰囲気包まれる。今こそ周辺住民らが集まる癒やしの場となっているが、以前はごみがあふれ、ホテルもほとんど見られなかった。十五年以上の時間を要したという、この場所の自然再生の歩みをたどった。

(磯嶋康平)



大谷川は源流から東へ岩船神社の脇を流れ、坂下町辺りで内津川に合流し、庄内川へと注ぐ。六月半ばの午後七時すぎ、ホテルが姿



●昨夏、大谷川の自然の中を飛び交うホテル ●樹木がほとんどなかった頃の大谷川の土手―いずれもどりのまちづくりグループ提供

再生の鍵 熱意実った植樹



ホテルが飛ぶ川を長年かけて再生した高橋さん(右)ら=春日井市廻間町の大谷川で

を見せるより少し早く、神近くを訪れた。川幅は数年かけてホテルがすめる環境に再生したボランティア植わり、きれいな水の流が田畑や森を取り巻き「日本の原風景」といった趣だ。

「活動を始めた当初は木のまったくなく、ホテルも

の地と伝わる松河戸町にかけ、分断された自然をつなぎ「緑の回廊」を作ろうと発足。大谷川源流での活動はその一環として、〇五年から始まった。

高橋さんによると、当時の源流付近は樹木が一本もないばかりか、南側の土手の上を市道が通っていることもあってか多くのごみが捨てられていたという。清掃はもちろん、土手の植樹は「水質の向上や、ホテルの産卵場所となる木や草、コケの確保につながる」とことから不可欠だったが、苦労は多かった。

川を管理する県尾張建設事務所からは「公共の場」を理由に植樹を断られ、県が進める自然豊かな川づくりの事業にも面積不足で採用が難しかった。それでも高橋さんたちは県側と交渉を続け、熱意が実って〇七年によりやく許可を得た。

中部大の応用生物学部などのもも借りて調査や計画

高橋さんは「自然の再生には長い年月がかかる。多くの人にホテルを見せたい、身近な自然を大切にしたい」と願った。